

衣食住、性、エンタメ……すべてのものには“人類との歩み”がある！

書評プロガー
骨じゅぶりの



『○○の文化史』

ぜんぶ読む

Vol.56

スーツ

今回のテーマ▼

スーツの出自は
機能服だった

窮屈。高い。暑い。洗にくい。
スーツのネガティブ面は枚挙にいとまがない。
それでも現代まで生き残り続けているのはなぜか。
スーツ嫌いの書評家が、歴史をひもときながらその謎に迫る！

俺はスーツが嫌いだ。日常的にはほとんど着ていない。窮屈だし、夏は暑い。ボタンを留めてシャツを着てジャケットを羽織ってネクタイを締めるなんて、装備が多すぎる。伸縮性も低く、体が自由に動かない。

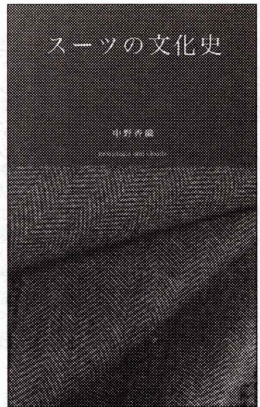
それだけじゃない。洗濯機にそのまま入れられず、アイロン、クリーニングがいる。着心地がいいなら手入れの面倒も許せる。でも着心地は悪く、おまけに高い。

幸い、今は日常的にスーツを着なくて済んでいる。問題は就活のリクルートスーツだった。毎日着るのを強制され、腹立たしかった。クールビズ

などでスーツは減ってきたが、まだ社会には残っている。それほど残るなら、何か合理性があるはずだ。

だが、歴史を見ると話は少し変わる。スーツは最初から非合理的な服ではなかった。むしろ古い男性服よりも合理的な服として発展してきた。

その出発点は1666年10月7日にさかのぼる。イギリス国王チャールズ二世が衣服改革を宣言したのだ。これは「新しい衣装一式を採用する。もう変えない」という趣旨だった。当時の男性服が、スーツとは比べものにならないほど非合理的だったからだ。詰め物で体形を作り上げ、ストッキングとヒールで脚線美を演出し、裾や袖口からはシャツがあふれ、靴までリボンず



スーツの文化史

中野善範

『スーツの文化史』

著者名：中野善範

評価 ★★★★★☆

スーツの形や信頼感の理由を、チャールズ二世の衣服改革からジェントルマン文化、階級闘争、労働者への普及、日本での受容までたどって解き明かす。スーツに社会の視線と歴史が積み重なってきたことが納得できる。2000年刊の『スーツの神話』（文春新書）を加筆修正したKindle版

くめ。体を誇示・装飾するこ
とだけが目的の服だった。
この衣服改革によって生まれたのが、上着＋ズボン＋ベスト＋シャツ＋ネクタイという基本構成だ。チャールズ二世が「もう変えない」と宣言したのは1666年。それから360年たった今も、この構成は男性の正装の基本として残っている。本人が思っていた以上に、「もう変えない」が実現してしまった。ただし形は今と全然違った。ズボンは半ズボン、ベストは丈の長い黒いコート、その上にさらに外套を重ねる。枠組みは今に続くが、見た目はまだ似ても似つかなかった。

では、なぜ今の形に近づいたのか。宮廷ではなく、地方に居を構えて日々屋外で活動するカントリィ・ジェントルマンの装いがその答えだ。狩猟、乗馬、領地管理。そうした活動に最適化された彼らの服が、宮廷服の後継として男性服の主流に取り込まれていった。風雨を防ぐ実用的な襟動きを妨げない細い袖口、汚れが目立たない地味な色、体になじむウール素材。これらはデザイン好みではなく、屋外で動くための必要性から生まれた選択だった。

こうして見ると、スーツはただ窮屈なだけの服ではない。古い正装の装飾を削り、屋外の実用性を取り込みながら発展してきた服だった。

**服のセオリーを
言語化した男**

これまで見てきたのは着る



ロンドンのサヴィル・ロウには著名なテイラーが密集し、「スーツの聖地」とも呼ばれる。日本語の「背広」も同地名に由来するとの説がある

本人にとつての合理性だ。しかし服には別の合理性もある。他人にどう見られるかだ。その社会的な合理性こそ、スーツが長く生き残ったもうひとつの理由だ。

社会的な合理性を言語化したのが、18世紀イギリスのチェスターフィールド卿だ。政治家・外交官として活躍した彼は、息子への手紙の中でジエントルマンの服装原理を説いた。派手すぎても、みすばらしすぎてもいけない。その場の人々と同程度の服装をする。服で個性を出しすぎない。体に合ったものを着る。服装を摩擦なく場に入るための技術としてとらえた。

19世紀に入ると、この考え方を切実に必要とする人たちが大勢現れた。社会の表舞台に出てきた中産階級や労働者階級だ。彼らもジエントルマンの外見を必要とした。高価な仕立て服には手が届かないが、安価な中古服を着ていては社会的な体面を保てない。そこに着目したのがモーゼズ社だ。既製服のスーツを「これを着ればジエントルマンらしく見える」という形で売り出した。チェスターフィールドが言語化した原理を、誰にでも買える商品にしたのである。

この構図は、現代にもそのまま当てはまる。わかりやす

いのがリクルートスーツだ。新しい社会に参入しようとする人間が選ぶ服装という構造はモーゼズ社の時代から変わっていない。みんな似た黒や紺のスーツで、目立たず、みすばらしくなく、まず受け入れてもらう。チェスターフィールドが息子に説いた原理を、そのままやっているわけだ。

これは一般人に限った話ではない。キーエンスのトップ営業マンもマツキンゼーの戦略コンサルタントも、顧客先では派手すぎず地味な無難なスーツを選ぶという。相手の輪に入っていくときは、個性より無難さを優先する。それがスーツの社会的な合理性の正体だ。

ここまで来ると、俺のスーツに対する怒りの正体が見えてくる。スーツには社会的な合理性がある。しかし俺は就活のとき、その社会的な合理性のために、身体的な合理性をいやいや犠牲にさせられた。腹が立っていたのはそこだ。

だが歴史を振り返ると、このトレードオフは固定ではない。チャールズ二世がやった

のも、スーツという形式を作ったことではなく、「ちゃんとした男の服」の基準そのものを更新したことだった。過剰な装飾を捨て、社会的な受け入れやすさは保ちながら、身体的な利便性を増す方向へ。そしてスーツの歴史は、この更新を繰り返してきた。

俺はスーツという形式が嫌いだ。しかしスーツの歴史は、むしろ好ましいと思っている。社会に受け入れられる範囲で身体的合理性を追求する方向を一貫して歩んできたからだ。最近では、見た目はスーツでも、素材や着心地はジャージー、ニット、作業着に近い服も出ている。一見すると邪道に見えるが、歴史を考えればむしろ正統な更新だ。社会との摩擦を減らしながら、身体的利便性を増す。その両方を同時に追い続けてきた歴史だ。守るべきはスーツという形式ではなく、この方向性なのだ。

骨しぐり



書評ブログ。ブログ「本しぐり」で、本と何かを結びつけるブログを書いている。累計はてなブックマーク数は9万超